

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03989

研究課題名(和文) 障害者のキャリア支援のためのポートフォリオとそれを拡充する実習場面の機能分析

研究課題名(英文) Portfolio for carrier support of the persons with disabilities and functional analysis of the job exercise to expand the portfolio

研究代表者

中鹿 直樹 (Nakashika, Naoki)

立命館大学・総合心理学部・准教授

研究者番号：20469183

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：障害のある個人のキャリア支援を目的に研究を行った。1. 大学内模擬喫茶店舗での実習について「できる」を拡大する機能から検討した。「できる」は障害者と支援者の相互関係から作り出されること、支援者が障害者の行動の見方を変え、行動を待ち認めていくことで、拡大する可能性を示した。2. 特別支援学校での情報移行について検討した。生徒による、実習内容に直接は合致しない記述の中に興味関心などを理解する材料があることを示した。

研究成果の概要(英文)：We conducted research to support careers of individuals with disabilities. 1. We examined the function to expand "dekiru (can do)" in the job training at the simulated cafe shop in the university. "Dekiru" is created from the mutual relationship between disabled persons and supporters, showed the possibility that the supporter could expand by changing the view of behavior of the disabled and waiting for their behavior. 2. We assessed sharing information at special support school. We found that students there are materials that understand interests etc. of the students among the descriptions that do not directly correspond to the contents of the training that they had experienced.

研究分野：応用行動分析学

キーワード：特別支援教育 キャリア支援 情報移行

## 1. 研究開始当初の背景

障害のある子どもの生涯にわたる支援については、対象者のための個別の支援計画をベースに支援することが求められる。特別支援学校においては、個別の教育支援計画や個別の指導計画がその役割を担うものとなる。しかし我々は、障害のある児童・生徒や成人が何らかの移行をするにあたって、こうした計画の情報がまさに移行して機能することについては十分ではないことを明らかにしてきた。そのため、どのようにして、対象者に関する情報を蓄積・表現・移行すれば、真に対象者のQOL 拡大のための支援を行い、支援の継続を行うことができるのかという課題がある。本研究では、対象者が自ら進んでやりたいと思える「できる」ことを拡大することをQOL 拡大と考える。これまで研究分担者の望月は、「他立的自律」というキーワードにより「できる」ことの再定義を行ってきた。「できる」というのは、環境から切り離された形での単独の能力の謂いではない。どんな環境条件(先行事象)のもとで行動が自発され、行動に続いてどのような環境変化(後続事象)があるのか、といった3点セットの中で発現するものこそが、行動であり、「できる」である。この点については、障害の有無は関係ない。人の「できる」は何らかの環境条件の中で見られるものである。いわゆる健常者は、あまりに当たり前、そして健常者にカスタマイズされて存在する環境条件の中で生きているので、そのことに自覚的ではないし、周囲がそのことをことさらに問題にすることは少ない。障害のある個人の場合は、健常者とは異なる手助けや援助設定のもとで「できる」が見られることで、環境条件がやや顕在化しているに過ぎない。いずれにしろ、支援者が何らかの条件下での「できる」を見出したのであれば、そのことを次の支援者や関係者に情報を共有することで、対象者の「できる」を積み重ねていくことが可能となる。

我々のグループでは、これまで大学内の模擬喫茶店舗を利用した学生による実習支援という形態を具現化し、そこで確認した対象者の情報を「できますシート(京都市立西総合支援学校版)」や「キャリアアップシート(京都市立北総合支援学校版)」という名称のもと、前述の「先行事象 行動 後続事象」という3点の形で徹底的に記述する試みを行ってきた。しかし現状では、記録したものが次のステップへと機能しているとは言い難い。

場面を限定することによってこれらの問題について検討していくことが可能となるであろう。具体的には、特別支援学校の生徒(主に知的障害や発達障害の生徒)を対象として行われている、就労実習(就業体験などの名称もある)について注目し、実習という学校とは異なる場面での体験を、単なる体験(やってみた)で終わらすことのないように、

いかにして次の展開(学校場面に戻ったとき、次の実習を考えると、職業的な場面へと移行したときなど)につないでいくことができるのかといった点について考える。就労実習においては、一般に生徒に関する情報を、実習先や担当の教員などが積み重ねていく。そこで得られた情報を適切に機能させていくための内容・書式・共有の方法・共有場面の設定について検証していく必要がある。

我々は研究当初、情報について「ポートフォリオ」と「プロファイリング」という形で機能の分離を試みている。ポートフォリオとは、対象者の生活が進んでいく中でQOLの拡大=キャリア・アップへと結びつくことができるような機能を持った情報群のことである。一方プロファイリングとは、対象者の属性を考え、その属性をもった集団の中での位置づけという機能を持つ。たとえば「自閉症だから」といった支援が有効だ」という形になる。もちろん障害特性に合わせた支援が有効であるのは言をまたないが、支援者が行うべきは、その一歩先に行くことであり情報の機能として必要なのは、どうすれば次のステップへ向うことができるのかの手掛かりとなることである。

対人援助学のモデルである「援助・援護・教授」の3つの機能連環における、対象者に必要な援助設定を知るには、「試す」ことを行わなければならない。これは現実の実習場面では難しい。そこでは当該の職務への適応が求められるために積極的な「試す」をしにくい状況になる。そこに大学内の模擬店舗という場面設定の重要性と必要性がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、障害のある個人のキャリア支援を実現するために、対象者の情報をどのようにして作成・共有していくべきかを検討することである。ここでのキャリア支援とは職に就くことの手助けという意味ではなく、生活環境の中で見えにくくなってしまいがちな、対象者の「できる」こと、また援助付きで「できる」こと(自ら進んでやりたいと思えるようなこと、いわば正の強化で維持される行動)を発見し、記述し、伝達することである。援助付きで成立する「できる」ことは、文字通り援助が前提となるため、どのような援助が必要かについては、情報として記述し伝達し共有することが必要となる。また必要な援助は何らかの形で試してみる必要があり、環境が変われば援助も変化する。このような情報のあるべき姿を探るための実践研究を行う。

## 3. 研究の方法

2つのアプローチを採用した。

(1)実習場面の実践研究として、大学内に設置した模擬喫茶店舗に提携の支援学校生徒を実習生として受け入れ、対象生徒の「できる」を拡大する支援を行う中で、「できる」

の発見・記録・表現についての模擬喫茶店舗の機能を考え、「できる」の発見についての特定の場面を離れ実習そのものの機能を再確認することとした。

実習場面ではまず、喫茶店舗での接客やレジ業務などに求められる行動の成立に関して、一般的なジョブコーチが行う手法である課題分析に基づくシステマティック・インストラクションを用いて指導することで行動の成立を直接的に支援した。また実習参加者が店員として働く場面で、実習参加者がその場に直接必要な行動だけでなく、実習参加者が自らの工夫で取り組むことを「できる」こととして整理し、「できる」の発見・同定・記述をおこなった。直接業務に関連して働く場面だけでなく、大学に来ること、仕事に向けて準備をすること、援助者とともに昼食をとることなどさまざまな場面を通して実習生のキャリア・アップの向上を検討するという方法をとった。

(2) 児童・生徒の「できる」を拡大するための情報共有のあり方を検討するために以下の方法で行った。全国の特別支援学校における就労実習の取り組みを調査した。具体的には、就労実習場面において、情報の記録と移行が実践されている取り組みがあるかどうかをインターネット上に公開されている情報をもとに探索した。全国の特別支援学校における取り組みをインターネット上に公開されている情報をもとに調査した結果をふまえ、特定の学校と連絡をとり、情報の共有を進めた。全国的な傾向は捉えることができない一方で、特定の学校と密に情報共有を進めるなかでは、情報移行の取り組みを教育のなかでどのように位置づけることができるのかを理解することができると考えられた。特定の特別支援学校の教育における情報移行の取り組みについての調査を実施した。特定の特別支援学校を対象に、教育において用いられている実習の振り返りシートに焦点を当て、その実習情報をどのように整理し、活用できるのかを検討することを目的とし、実施した。教育のなかで個人の活動および「できること」は、どのように記録されうるのか、そして、個人のキャリア支援のためにどのように情報が整理され、活用されうるのかを検討するためである。ある特別支援学校において用いられている実習の振り返りシートを対象に、何がどのように情報が整理されているのかをふまえて、今後どのように情報を整理することができるか、どのように情報を活用することができるかを検討した。

#### 4. 研究成果

(1) 実践研究を通して：最終年度に行った実習については、計画立案の段階からの当事者参画と「できる」の拡大の関連という点から検討した。本実習では、実習参加者の「で

きる」について4日間の実習で114個の「できる」を発見・記述することが可能であった。当事者の参画と「できる」の拡大は並立しうることを示すことができた。また、実習場面を超えて自宅でも「できる」の拡大が見られたという報告を家族から受けることができた。強化的な環境によって、実習場面以外での「できる」を拡大するに至ったと考えることができる。また一見すると問題行動であっても「できる」と周囲の援助者が捉えることによって、そこを起点として新たに「できる」の拡大を目指すことができることが示された。

また本年度の実習も含めてこれまで行われてきた大学内模擬喫茶店舗での実習について、複数の実習を総括することであらためて大学内模擬喫茶店舗における職業実習、さらには実習という機能について検討したことを、次のようにまとめることができるであろう。

・大学内模擬喫茶店舗での実習は、実習参加者の行動成立に必要な援助設定を発見・シミュレーションするための場であること。

・実習は、実習参加者の「行動的 QOL」を拡大するための情報をつくる場であり、「よいところ」探し(「できる」を発見・創造する)のための機能分析をする場として働きうること。

実習場面での支援者の役割は次のようにまとめることができるであろう。

・自由な「実験者」としての支援者：実習参加者の「できる」の拡大に向けて、自らの援助行動を制約する現状の随伴性に自覚的になり、拘束されずに当事者の「できる」のための「援助」設定を探索すること。

・精緻な「表現者」としての支援者：実証的で説得力のある「援護」の発信すること。

・自由な「発想者」としての支援者：単なる付加的環境設定にとどまらず、新たな文脈の創造と提案による新しい「できる」の追求すること。

(2) 情報共有のあり方の検討：情報の記録と生成にあたっては、当人を含めた関係者からのより豊かな視点をもとに、当人の「できること」が見出されることが望ましいと考えられる(あるいは、豊かな視点があればこそ、当人の「できること」に気づくことができると考えることができる)。そのため、学校および担当教員の視点と当人の視点が交わっている点が浮かびあがるような情報の整理を試みた。より具体的には、この趣旨を全うすることができる試みの一つが、生徒がより自由度をもって記入することができる欄において、教員が定めた実習目標を反映した記述がどの程度なされているかを検討するものであった。調査では、実習の振り返りシートの中でも「できたこと/得意なこと」を記入する欄を、生徒がより自由に思ったことを表現できる欄として理解し、その欄の記述に

において実習目標と関連した記述がどの程度みられるのかを整理した。

結果のまとめとしては、教員が設定した実習目標あるいはシートに別項目として設定されていた評価項目に関連した記述が一定数あった。そのため、生徒は設定されている目標をある程度意識して実習に参加していたことがうかがえる。一方で、生徒は必ずしも教員の設定した実習目標をそのまま記述している訳ではなく、自分自身の言葉で、より具体的に表現をしている記述もみられる。

実習目標にそのまま合致しないようなこうした記述は、個々の生徒の興味関心や、生徒がどのように実習を経験したのか、を理解する材料として捉えることができる。

振り返りシート（特に生徒が自由に記述できる欄として「できたこと/得意なこと」を記述する欄）での記述には、個々の生徒の考えや思いが反映されると考えられる。つまり、この欄の記述を整理して理解することは、個々の生徒が実習をどのように経験したか（何を得たのか）を理解するきっかけとすることができると考えられる。教育実践の振り返りの材料となるだけでなく、その記述内容をふまえて適切に個々人にフィードバックすることができれば、個々の生徒の「できる」を拡大することにもつなげることができるだろう。

本調査では、振り返りシートの整理の仕方を探求した。この情報の整理が、実践現場においてどのような機能を果たせるのかを検討するためには、学校現場の教員の方々との協働が求められる。今後は、今回の結果と考察をもとに、現場の教員の方々の視点から、現場実践を読み解き、理解できるような研究の試みが必要となるだろう。個々の生徒と教員の視点や考え方を理解することによって、生徒と教員の視点の交流あるいは拡がりを促すような研究へと発展していくことが期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

土田菜穂・中鹿直樹、特別支援学校における行動コンサルテーションの効果：教員の支援行動の変容に着目して、立命館人間科学研究、査読有、37巻、2018、125-136

中鹿直樹、大学内模擬喫茶店舗における障害のある生徒のキャリア支援、立命館人間科学研究、査読有、37巻、2018、115-123

高山仁志・中鹿直樹、正の強化で維持される行動の選択肢の拡大をミッションとする立場からみる二人称の科学、対人援助学研究、査読有、5巻、2017、13-17

中鹿直樹・川村徹也、知的障がい者の就労場面における役割設定の効果、立命館文學、

査読無、望月昭教授退職記念論集、2016、565-569

中鹿直樹、Visual Basic を用いた時間制御のプログラミング、行動分析学研究、査読有、30巻、2015、65-69

〔学会発表〕(計11件)

高山仁志、中鹿直樹、行動的QOL再考：選択か、拒否か、随伴性か、日本行動分析学会、2017年

土田菜穂、中鹿直樹、朝野準備行動に課題のある生徒に対する支援の検討 特別支援学校における行動コンサルテーションを通して、日本特殊教育学会第55回大会、2017年

吉尾玲美、鳥取直子、高山仁志、中鹿直樹、これがあればできる！障害のある個人による「できる」の拡大、対人援助学会第9回年次大会、2017年

鳥取直子、高山仁志、朝野 浩、土田菜穂、中鹿直樹、障害のある個人の当事者参画による「できる」の拡大、対人援助学会第9回年次大会、2017年

中鹿直樹、土田菜穂、望月 昭、キャリア支援としての大学内模擬店舗での就労実習、日本特殊教育学会第54回大会、2016年

中鹿直樹、土田菜穂、望月 昭、障害者の継続的な支援のための情報移行の書式の検討、対人援助学会第8回年次大会、2016年

立花周太、吉尾玲美、中鹿直樹、望月 昭、障害者の継続的な支援のための情報移行の書式の検討 - 「できますシート」におけるアイデアの量的増加および質的向上に向けた介入の効果 -、対人援助学会第8回年次大会、2016年

吉尾玲美、高山仁志、中鹿直樹、朝野 浩、「できる」を見つけるキャリア支援、対人援助学会第8回年次大会、2016年

中鹿直樹、学生ジョブコーチにおける事例報告、対人援助学会第7回年次大会、会員企画ワークショップ、2015年

朝野 浩、西村二郎、京都市私立幼稚園「個別の保育支援計画」の策定、対人援助学会第7回年次大会、2015年

中鹿直樹、渡辺 舞、立花周太、吉尾玲美、土田菜穂、望月 昭模擬店舗のキャリア支援機能 学生ジョブコーチの実践から、対人援助学会第7回年次大会、2015年

〔図書〕(計1件)

望月 昭、武藤 崇、晃洋書房、応用行動分析から対人援助学へ-その軌跡をめぐって、2016、184 (1-178、 180-184)

〔産業財産権〕

〔その他〕

ホームページ等

[http://www.yuruyaka-lco.com/contents\\_nakashika.html](http://www.yuruyaka-lco.com/contents_nakashika.html) 研究者インタビュー 中鹿直樹 すべての「できる」は援助付き

6．研究組織

(1)研究代表者

中鹿 直樹 (NAKASHIKA, Naoki)  
立命館大学・総合心理学部・准教授  
研究者番号：20469183

(2)研究分担者

滑田 明暢 (NAMEDA, Akinobu)  
静岡大学・国際センター・特任講師  
研究者番号：00706674

望月 昭 (MOCHIZUKI, Akira)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：40129698

朝野 浩 (ASANO, Hiroshi)  
立命館大学・教職教育推進機構・教授  
研究者番号：70524461

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

高山仁志 (TAKAYAMA, Hitoshi)